

平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1979年度において第116次から第121次までの43件に及ぶ発掘調査を行なった。平城宮内では、推定第一次内裏東寄りの区画の調査（第117次）及び推定第一次朝堂院南門地区の調査（第119次）のほか、東院園地西南地区の調査（第120次）を行なった。

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6ABD・BQ	平城宮 第117次	79. 9. 19～80. 1. 12	32.00a	第一次内裏
6ABV・BW	平城宮 第119次	79. 6. 15～79. 11. 10	21.30a	第一次朝堂院南門
6ALF-R・Q	平城宮 第120次	80. 1. 18～80. 5. 6	25.00a	東院園地西南
6ADA-H	平城宮 第118-10次	79. 8. 15～79. 8. 17	0.26a	宮西北部
6ADA-F	平城宮 第118-11次	79. 8. 17～79. 8. 18	0.10a	北面大垣
6ABN-T	平城宮 第118-13次	79. 9. 13	0.42a	宮西北部
6ACD-A	平城宮 第118-32次	80. 3. 17	0.09a	宮東辺部
6AFG-N・O	平城京 第116次	79. 3. 23～79. 7. 19	36.40a	左京三条四坊七坪
6AFI-Q	平城京 第121次	80. 1. 9～80. 2. 4	4.00a	左京三条二坊六坪
6AGO-F	平城京 第118-1次	79. 4. 10～79. 4. 26	1.10a	右京五条二坊五坪
6BSD	平城京 第118-2・20次	79. 4. 24～79. 4. 25 79. 11. 7～79. 11. 16	0.03a 0.96a	称徳天皇御山荘推定地
6BFK-Q	平城京 第118-3次	79. 5. 26～79. 5. 29	0.10a	法華寺旧境内
6AFC	平城京 第118-4次	79. 5. 7～79. 5. 16	0.74a	左京一条二坊十五坪
6AI-E	平城京 第118-5次	79. 5. 14～79. 5. 17	0.61a	右京七条一坊十五坪
6AGR-B	平城京 第118-6次	79. 5. 30～79. 6. 4	0.40a	北辺坊二坊二坪
6AFJ-V	平城京 第118-8次	79. 7. 4～79. 8. 5	5.88a	左京三条一坊十五坪
6BFK	平城京 第118-9次	79. 7. 23～79. 7. 31	0.63a	法華寺旧境内
6AGO	平城京 第118-12次	79. 8. 27～79. 8. 30	0.25a	右京五条二坊十四坪
6AFC	平城京 第118-14次	79. 9. 21	0.14a	左京一条二坊四坪
6AFI-R	平城京 第118-15次	79. 10. 2～79. 10. 6	1.50a	左京三条二坊二坪
6AHD	平城京 第118-16次	79. 10. 11～79. 10. 17	1.40a	左京六条一坊十坪
6ABA-A	平城京 第118-18次	79. 10. 26～79. 10. 29	0.18	宮外北方
6AFJ	平城京 第118-22次	79. 12. 3～79. 12. 6	0.35a	左京三条一坊八坪
6AFI-R	平城京 第118-23次	79. 12. 17～79. 12. 21	1.60a	左京三条二坊七坪
6BFK-T	平城京 第118-25次	80. 1. 16 9	0.12a	法華寺境内
6ARJ	平城京 第118-26次	80. 1. 28～80. 1. 30	0.30a	羅城門跡
6BYS	平城京 第118-27次	80. 1. 31～80. 2. 4	0.25a	薬師寺西面大垣
6AGA-C・E	平城京 第118-29次	80. 2. 8～80. 3. 4	5.70a	右京一条二坊西一坊大路
6BFK-B	平城京 第118-30次	80. 2. 16～80. 2. 25	0.60a	法華寺阿弥陀净土院
6AGA	平城京 第118-31次	80. 2. 21～80. 2. 26	0.46a	右京一条二坊西一坊大路
	第118-7次	79. 6. 14～79. 6. 15	0.07a	御前池北辺
	第118-17次	79. 10. 8	0.02a	水上池北辺
	第118-19次	79. 10. 31	0.01a	宮外北方
	第118-24次	80. 1. 8	0.01a	宮外北方
6BYS	薬師寺	79. 8. 6～79. 10. 5	9.00a	東僧房
6BTD	東大寺	79. 8. 27～79. 9. 18	6.60a	西南院
6BTD	東大寺	79. 11. 20～79. 12. 4	1.02a	僧房北方
6BSD	西大寺	79. 10. 23～79. 11. 1	2.14a	西塔南
6BHE	法隆寺	79. 8. 27～79. 9. 6	0.6 a	東院西面築地
6BHR	法隆寺	80. 2. 25～80. 4. 12	3.87a	西院西北方

平城宮跡と平城京跡発掘状況

平城京内では、近年の市街地の拡大に伴ない開発事業の事前調査を行なう例が増えている。左京三条四坊七坪の奈良郵便局建設予定地の調査(第116次)をはじめ、特別史跡左京三条二坊六坪宮跡庭園での奈良市民文化センター建設に伴なう調査(第121次)のほか、条坊遺構確認のための小面積の調査を行ない、数多くの成果を上げている。さらに、京内諸寺院でも建築物の建設計画に伴ない、薬師寺東僧坊跡や西大寺西塔南などの調査を行なった。

以下に主要な調査の概要を報告する。

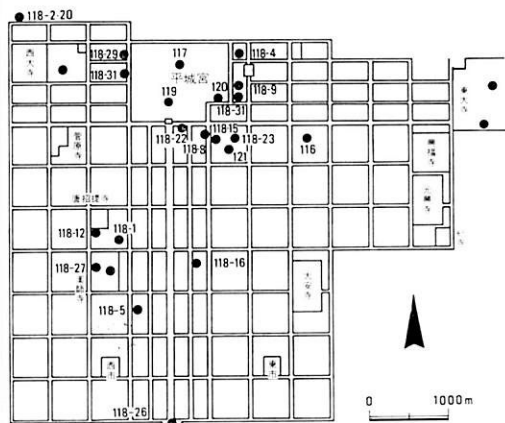
1. 平城宮跡の調査

推定第一次内裏地区の調査(第117次) 平城宮の中央朱雀門の北方地域は推定第一次内裏・朝堂院地域と呼ばれている。今回の調査地は推定第一次内裏東半部第27次調査地と第89次調査地との間で、調査区の地形は北側で大きな段差がつき、南側が低く、やや東南にゆるやかに傾斜しており、ほぼ中央には南北に奈良時代の高さ1.5mの土塁がつらなっている。

遺構 今回検出した主な遺構は埴積擁壁・石積擁壁・斜道・築地回廊・築地・土塁・建物2棟・堀3条・井戸1基・溝8条・石敷広場・足場穴・土壙であり、第1次内裏地区は区画の変遷から3時期に区分できる。

A期 第1次内裏の東面は築地回廊・堀で区画される。築地回廊S C5500は雨落溝S D3767・3790、足場穴S S3795によって復原できる。この築地回廊の両雨落溝には上・下2層あり、また建築時の足場穴にも時期を異にするものがあることより、築地回廊は建て替えが想定できる。堀S A3777を今回11間分検出した。柱間は約4.6m等間で調査区のほぼ中央で1間分欠けており、出入口が想定できる。東面の区画は、第27・41次調査の所見を加えれば、A期の中で築地回廊→堀→築地回廊の変遷が認められる。埴積擁壁S X6600は築地回廊に直接とりつかずに、最終的には南にまがり、築地回廊との間約15mが北側の壇にとりつく斜道S F9232-Aとなる。埴積擁壁の埴は残りの良い所でも基底部の2段を検出したにすぎない。壇の下は石敷広場である。

B期 この時期の東西築地回廊S C8360の痕跡は本調査区では検出していない。埴積擁壁S X6600が埋め立てられ、約20m南に石積擁壁S X9230が築かれる。検出したのは石積擁壁基底部の一段とその抜取穴である。壇にとりつく斜道は傾斜をゆるめて存続する。斜道が平坦面となる位置に、桁行5間、梁行3間、8尺等間の北庇をもつ東西棟建物S B9220がたてられる。壇の下は石敷広場であるが、発掘区の西端中央部、石積擁壁の約30m南に、井戸S E9210が掘られる。井戸の掘形は東西8m、南北7mの大規模なもので、2段掘りをしており、深さは約

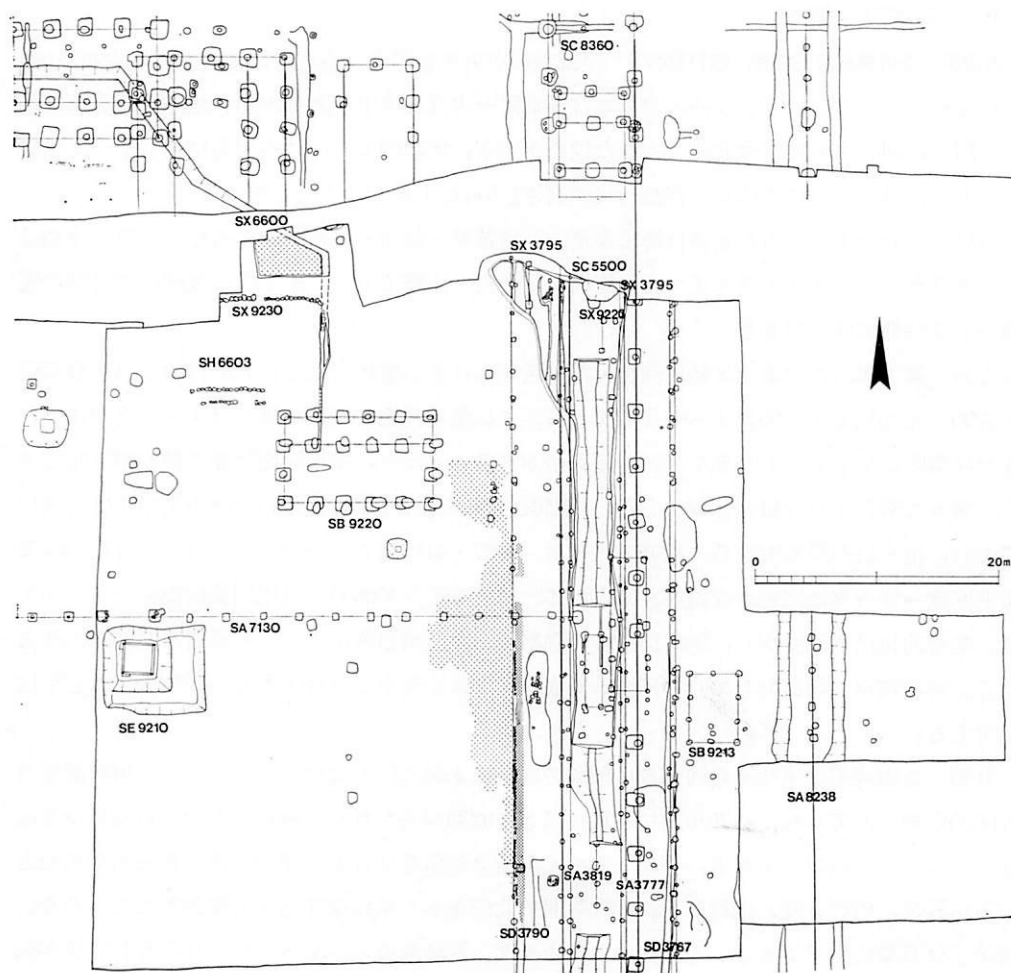


平城京内発掘調査位置図

4 mある。井戸枠は井籠組で、現在4段残存しており、下から板・校木を交互に組む特異な構造で、高さ80cm、内法230cmの、宮内最大の井戸である。校木は校倉の転用材である。

C期 築地 S A 3819 A が土塁 S A 3819 B に改作され、2小期にわけられる。石積擁壁は存続し、壇の下は石敷広場である。C₁期 築地 S A 3819 A で東西が画される。東西塀 S A 7130 は井戸 S E 9201 の北側に構築される。今回13間分検出した。柱間は10尺等間、井戸の部分では14尺、築地には7尺で取りつく。C₂期 築地は土塁に改作される。土塁は最大幅3 mで、高さ1.5 m 残存している。その東約18 mに南北塀 S A 8238 が作られる。土塁と塀の間には桁行3間、梁行2間の南北棟建物 S B 9213 が建つ。

遺物 瓦は埴輪擁壁 S X 6600 を埋めたてた所から平城宮瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）の瓦が出土した他は第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）の瓦が多数を占める。土器の出土量はきわめて少ない。井戸 S E 9210 からは10世紀代の土師器が出土し、その抜取穴からは11世紀代の瓦



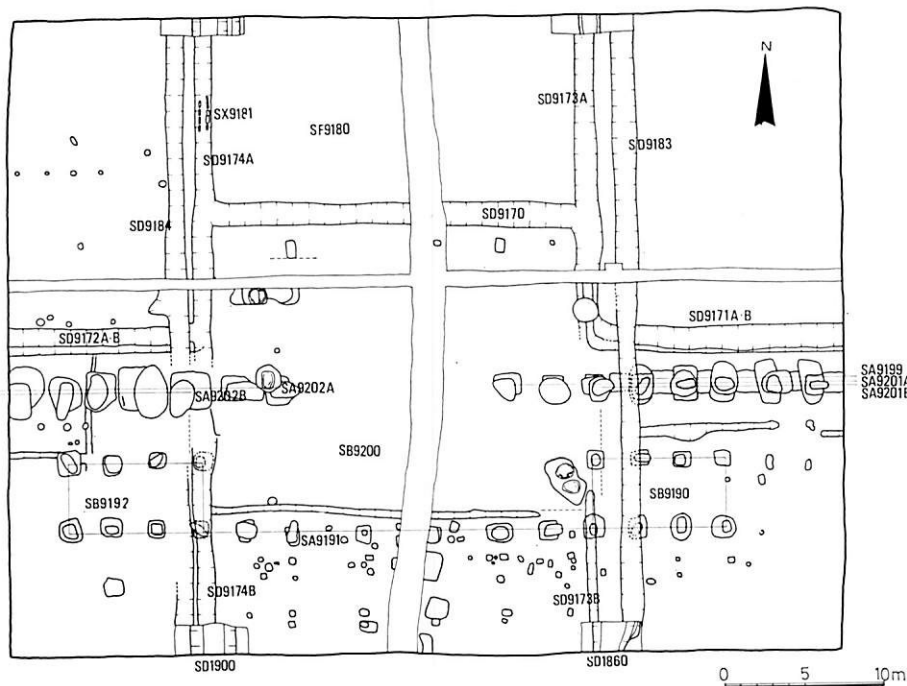
第117次発掘遺構図

器が出土した。この他同井戸から櫛・曲物や木簡が1点出土し、また井戸抜取穴から鉄鎌が1点出土した。

まとめ 今回の調査で第一次内裏地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来の調査成果をふまえてこの地区全体を概観する。A期（平城遷都～天平勝宝末年）東西約180m、南北320mの区画を築地回廊で画す。北から約 $\frac{1}{3}$ の位置に埴積擁壁が築かれ、北側は南側に比して一段高い段となる。この壇上には大規模な基壇建物が建てられる。壇の下は石敷広場である。B期（天平宝字年間～奈良時代末）A期の区画と東西幅は変わらずに、南北ともに縮められ、約185mの規模となる。この時期も築地回廊で区画される。壇上には正殿を中心に10尺方眼で割付けられた多数の殿舎が整然と建ちならぶ。壇の下は石敷の広場である。C期（奈良時代末～平安時代初頭）B期の区画を踏襲するが、築地回廊が築地に改作される。壇・井戸はこの時期にも存続する。壇上には正殿を中心として扉による仕切りを多用し、平安宮内裏の古図に似た配置をとり、内裏的な様相を示す。壇の下は石敷広場で、南門は小規模になる。この門の南には大規模な建物が建てられる。

推定第一次朝堂院の調査（第119次） 推定第一次朝堂院地区ではこれまでに第27・72・75・77・97・102・111次調査を実施し、北・東辺の様相が明らかになっている。今回の調査は南門の検出を目的としている。検出した主な遺構は、建物4棟・掘立柱塀6条・溝5条・道路1条などである。これらは6時期に区分できる。

A期以前 平城宮造営以前の時期で、下つ道の東西側溝SD1860・1900がある。溝心心距離



第119次発掘遺構図

は北で20.05m, 南で24.9m。朱雀門地区(第16・17次)では24.5mであった。

A期 平城宮造営当初の時期。東西塀 S A 9199・9201 A・9202 Aで朝堂院南辺を画す。S A 9201 A・9202 Aは朝堂院南北中軸線に対称で, その間(50尺)は閉塞しない。内側の柱掘形はともにB期の S B 9200の掘込地業下で検出。S A 9199は S A 9201 Aより古い。

B期 朝堂院南門 S B 9200と東西塀 S A 9201 B・9202 B及び S F 9180を設けた時期。S B 9200は基壇上にたつ東西棟礎石建物であるが, 基壇がほとんど削平され, 掘込地業の範囲(26.0×16.0m, 深さ0.4m)を確認したにとどまる。土壙出土の礎石4個は柱座や地覆座を造出す。S A 9201 B・9202 Bは S B 9200妻側中央に取付く。S F 9180は S B 9200北側の玉石敷道路。東は S D 9173 A, 西は S D 9174 A付近で終る。

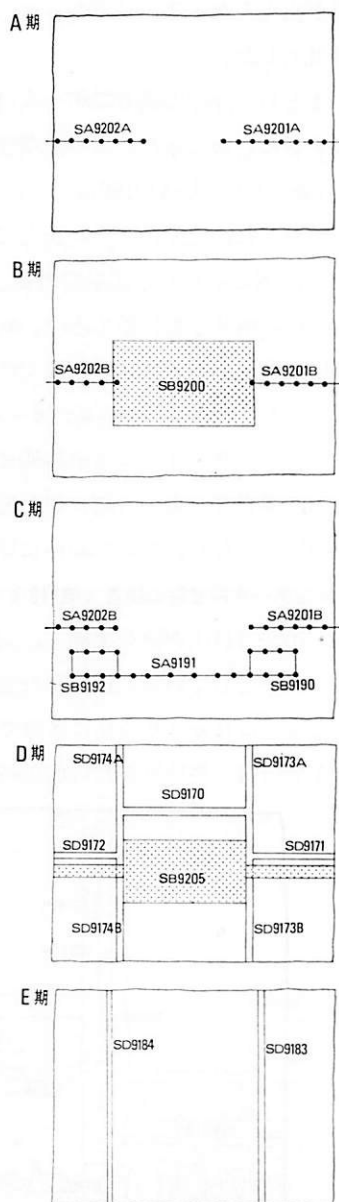
C期 S B 9200の廃絶後・掘立柱建物 S B 9190・9192と両者をつなぐ東西塀 S A 9191で朝堂院南辺中央部を閉塞した時期。S B 9190・9192は同じ規模の東西棟(1×3間), S A 9191は7間。S A 9201 B・9202 Bはこの時期にも存続する。

D期 溝の配置から朝堂院南門 S B 9205が造営されたと考える時期で, 2小期に区分できる。D₁期には東西溝 S D 9170・9171 A・9172 A, 南北溝 S D 9173 A・9174 Aがあり, 相互に接続する。S B 9205は S D 9170の南, S D 9173 A・9174 Aの間(溝心々距離約24.2m)に想定できる。S B 9200より小規模になる。S B 9205には第一次朝堂院地区東辺の調査結果から築地塀が取付く可能性が強く, S D 9171 A・9172 Aはその北雨落溝と考える。

D₂期には S D 9171 A・9172 Aを改修し, S D 9173 A・9174 Aを南に直流させる(S D 9171 B・9172 B・9173 B・9174 B)。S D 9174の北部には東西兩岸に埧と凝灰岩を並べた渡溝施設 S X 9181(長さ2.2m)がある。

E期 S B 9205が廃絶した後の時期で, 南北溝 S D 9183・9184があるにすぎない。溝心々距離は約28.3m。

遺物 土器は少ないが, 瓦は多量に出土した。主要なものは軒瓦229点, 鬼瓦5点。軒瓦は



第119次遺構変遷図

平城宮第Ⅰ期(和銅元年～養老5)の瓦が90%を占める。その多くは藤原宮式(85点)と6284—6668型式(各36・39点)の1組。鬼瓦はすべて獸身文である。

まとめ これまでの調査によって推定第一次朝堂院地区の東西規模は約720尺(215m)に復原している。南北規模は第77次の推定第一次大極殿地区南門の調査と今回の朝堂院南門の調査によって約960尺(285m)と確定した。また、朝堂院南門地区では5時期の変遷があり、とくに門は中断期(C期)をはさんで建替えられていることが判明した。各時期の絶対年代を決定する資料は得られなかったが、おおむねA期が8世紀初頭、B期が8世紀前半、C期が8世紀中頃、D期がC期以後奈良時代末まで、E期が9世紀初めの平城上皇の時期に比定できる。

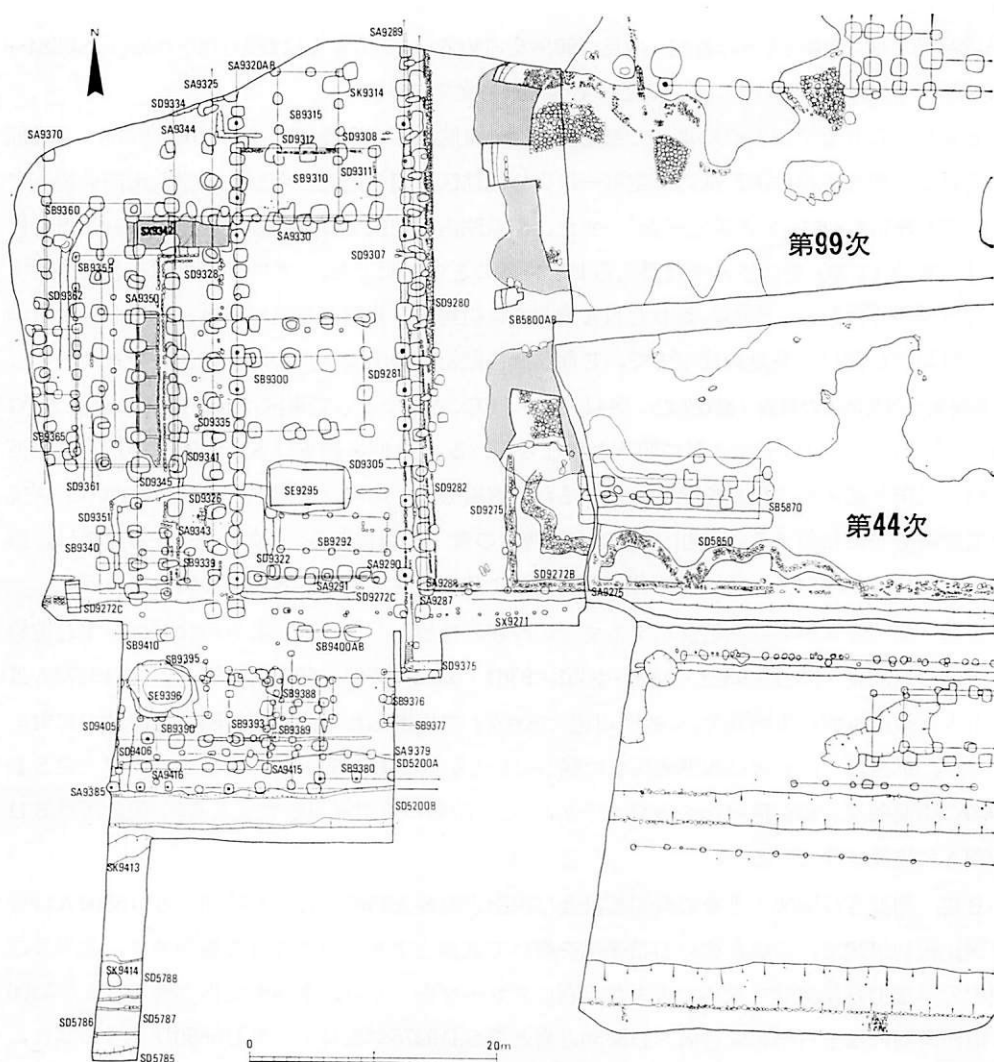
東院園池西南地区の調査(第120次) 第44・99・110次調査によって東院地区東南隅の園池(SG5800)とその周辺の様相が次第に明らかになっている。今回の調査はSG5800の西辺及び南面大垣・二条々間大路の様相を明らかにするため実施した。地山は灰黒粘土・青灰砂がベースで東南に緩やかに傾斜する。地山面には古墳時代の溝・土塋がある。検出した主な遺構は、掘立柱建物18棟・堀14条・溝28条・井戸2基・池1基・通路1条で、8時期に区分できる。

A期 東院造営から庭園造営に至るまでの時期。建物としてまとまるものはない。主な遺構に溝SD9272A・9321・9322・9326・9351・9361・9362・5785・5200Aがある。SD9272Aは南面大垣築造以前の東西溝で、門周辺(第39次)で検出した東西堀SA5505と時期的に対応するが、東西堀そのものは本調査区まで延びていない。SD5785・5200Aは二条々間大路SF5940の南北側溝。両側溝はのち改修するが、この時期の道路幅が最大である。他の溝はSD9272Aに接続させている。

B期 園池SG5800Aとその付属施設及び南面大垣SA5505を設けた時期。SG5800Aは汀線が比較的単調で、傾斜の強い石積擁壁を築いて護岸とする。西辺では改修があり、北岸及び南岸の一部で石積擁壁を埋めて大きな玉石のスロープをつくり、半島を突出させる。SG5800Aの西南隅には玉石組の蛇行溝SD5850と南北溝SD9275が取付く。SD5850は曲水の宴に、SD9275は常時の排水に利用されたのであろう。園池の西は東面大垣から西約70mに位置する玉石組の南北溝SD9280で画す。その西には南北堀SA9343・9344で西辺を画す北庇付東西棟建物SB9300と井戸SE9295を配す。SA5505は基壇積土の一部と掘込地業を確認した。玉石組の北雨落溝SD9272Bと南雨落溝SD9375の心々距離は20尺、築地基底幅は寄柱痕跡から7尺に復原できる。

C期 園池西方を改作した時期。園池を画すSD9280を廃し、玉石溝SD9281・9335を伴う南北堀SA9287・9325を設けて幅16.6mの南北に細長い区画をつくる。この区画の北には雨落溝SD9308を伴う東西棟建物SB9310、南には目隠堀SA9291を設けて南面大垣に門SB9400Aを開く。SB9400Aは東院地区の西辺から約33mに位置する。SE9295はこの時期にも存続する可能性が強い。

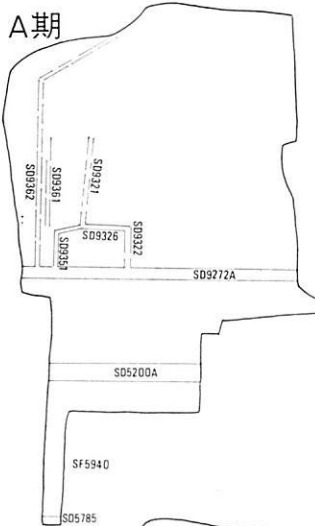
D期 園池を改作(SG5800B)した時期。園池西方も様相が一変する。SG5800Bは旧状を



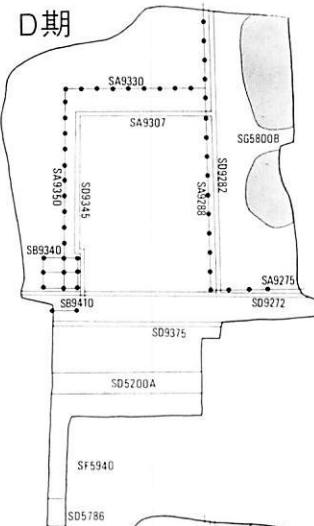
踏襲するが、汀線を広げ、スロープを緩やかな玉石敷とする。また、半島を拡張し、半島と池尻に奇岩を加える。園池西方もこれにあわせて全面的に玉石を敷く。S A 9287を廃して造営方位より北で西に約3°振れる南北塀 S A 9288を設け、S A 9275・9330・9350を接続させる。それぞれに玉石溝 S D 9282・9307・9345が伴う。S A 9330の南面、S A 9350の東面の玉石敷には、柱筋に直交する方向に幅約10cmの目地を入れているが、性格が明らかでない。3条の塀で囲まれた内部は広場として利用されたのであろう。S A 9350の南には総柱建物 S B 9340があり、南面大垣に門 S B 9410を開く。この位置は東院地区のほぼ中央にあたる。二条々間大路南側溝は北に約3 m移す(S D 9786)。

E期 D期のS A9288・S D9282を踏襲し、その西には玉石組の南北溝S D9328を伴う南北堀S A9320Aを設けて通路状の区画をつくり、南に目隠堀S A9290を設け、南面大垣に門S B

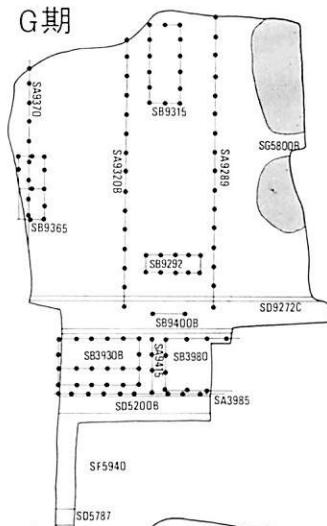
A期



D期



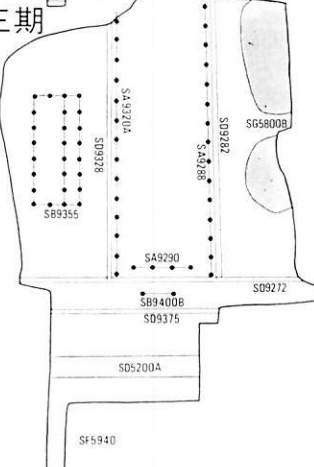
G期



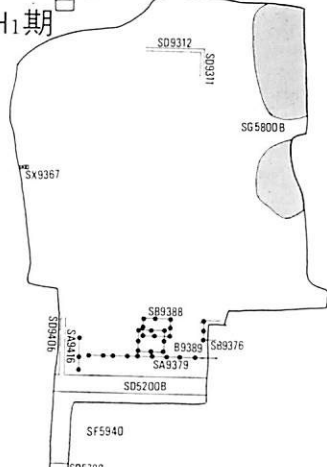
B期



E期



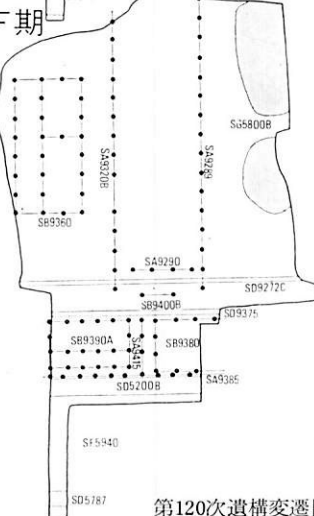
H1期



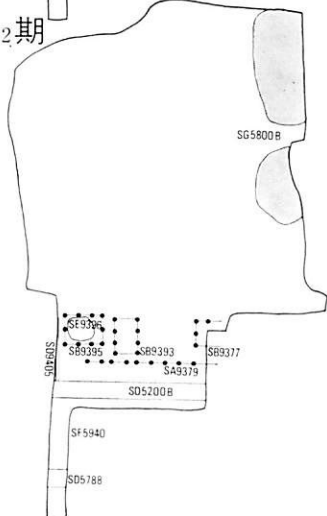
C期



F期



H2期



第120次遺構変遷図

9400 Bを開く。S A 9320 Aの西には東庇付南北棟建物 S B 9355を配す。

F期 S A 9288・9320 Aを廃して S A 9289・9320 Bを設ける(東西幅約13.5m)。S A 9320 Bの西には間仕切のある東庇付南北建物 S B 9360を配す。二条々間大路北側溝は南に約3mずらし、南側溝は幅を狭める(S D 5200 B・5787)。両側溝とも玉石で護岸する。拡張した堀地には南庇付東西棟建物 S B 9390 Aと東西棟建物 S B 9380を設ける。両建物は東西堀 S A 9385と南北堀 S A 9415で画す。

G期 F期の配置をほぼ踏襲。通路状区画に東西棟・南北棟建物 S B 9292・9315, S A 9320 Bの西に間仕切がある S B 9365と時期の降る南北堀 S A 9370を配す。S B 9390 Aは庇を改作する(S B 9390 B)。

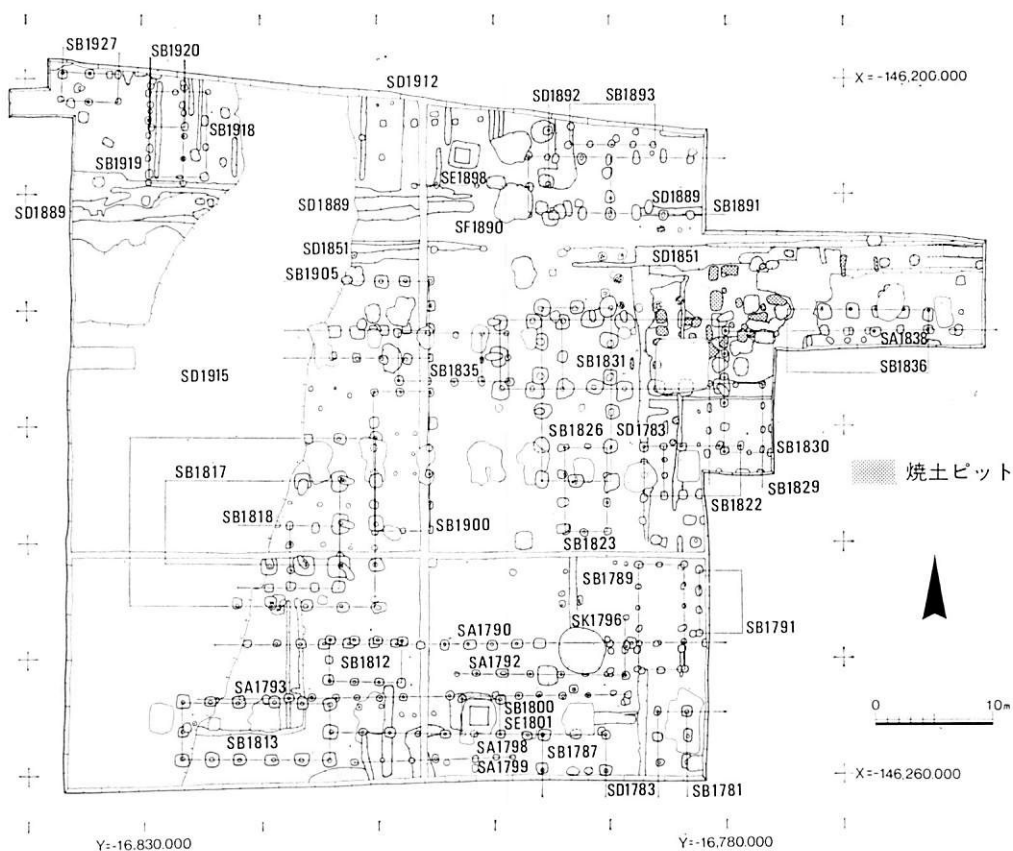
H期 S G 5800 Bの西に瓦敷溝などがあるが、後世の擾乱のため遺構配置が明らかでない。この時期二条々間大路南側溝はさらに北に移す(S D 5788)。堀地に小規模な建物群があり、2小期に区分できる。H₁期には東西棟建物 S B 9376・9388があり、堀 S A 9379・9416で画す。西には南北溝 S D 9406を設ける。S B 9388はこの時期に S B 9389に建替える。H₂期には東西棟・南北棟建物 S B 9377・9393をたて、西に井戸屋形 S B 9395を伴う井戸 S E 9396と玉石溝 S D 9405を設ける。

遺物 遺物は多量で、主に二条々間大路両側溝及び堀地付近から出土している。木簡は計108点、木製品は計550点。瓦埴類のうち軒瓦は計558点で、平城宮第Ⅲ期(天平17～天平勝宝年間)の瓦が半数を占める。遺構との関連でみると S D 2800 Aから和銅7年・養老5年の紀年木簡、天平12年以降に比定できる国郡郷里併記の木簡及びⅣ期(750～765)の土器、B期の S B 9300の柱抜取穴から第Ⅲ期の軒瓦、S E 9295の下層からⅡ期(710～725)の土器と第Ⅱ期(養老5～天平17)の軒瓦、井戸埋土から第Ⅲ期の軒瓦、S G 5800 Bから平安時代初頭の施釉陶器など、H期の S D 5788の溝底の土壙から奈良時代末～平安時代初頭の土器が出土している。なお、門 S B 9400 Bから扉の地摺や方立の枘穴などが穿たれた木製扉口地覆を転用した礎板(54.7×33.2×7.7cm)が出土した。

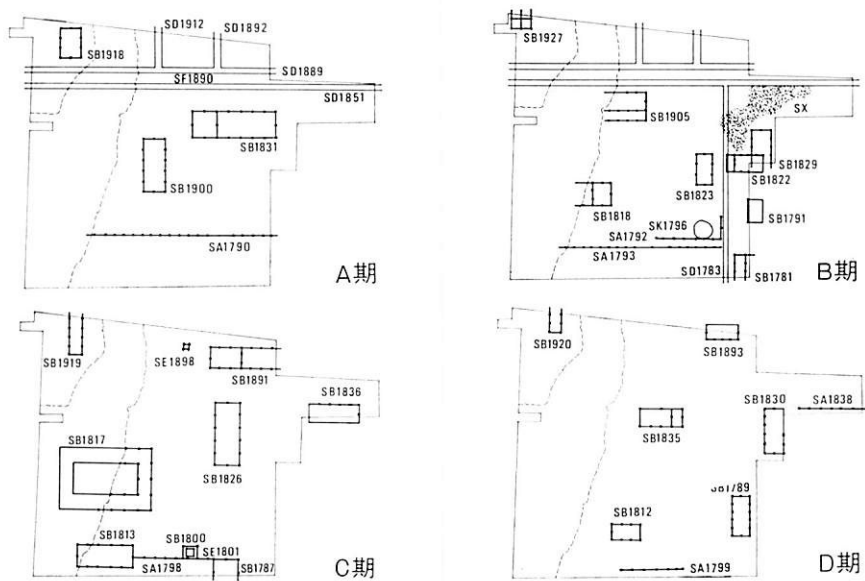
まとめ 今回の調査で園池 S G 5800 Bの全容がつかめ、東西・南北とも最大幅約60m、総面積1520㎡に及ぶことが明らかとなった。また、園池とは溝・堀で区切られた西方の一面は8時期の変遷があること、二条条間大路は次第に道路幅が狭くなっていることが判明した。各時期のうちB期は出土遺物から天平年間を中心とする時期に比定できるが、S G 5800 Aの造営開始時期については改修の有無の確認を含めて今後の検討を必要とする。S G 5800 Bの造営がはじまるD期は平城遷都後の天平勝宝年間の造営、H期は奈良末～平安初頭に比定できる。

2. 平城京の調査

左京三条四坊七坪の調査(第116次) 奈良郵便局庁舎建設に先立ち、七坪内の西南部分にあたる約¼を発掘調査した。検出した主な遺構は、掘立柱建物25棟、堀7条、道路1条、溝5条、井戸2基、土壙及び和同開珎鑄造に関係したと思われる焼土を含んだピット群などである。そ



第116次発掘遺構図



第116次変遷図

の結果、七坪は奈良時代初頭から平安時代初期にかけて継続的に利用されており、大きくA、B、C、Dの4時期に区分できる。

A期：七坪は、坪内小路S F 1890（溝心々で幅約3.6m）によって南北に2分して利用される。坪の南半では東西棟建物S B 1831を中心に、柱筋をほぼ揃えて南北棟S B 1900が建つ。坪内小路心から約36m（120尺）南に柱間7尺の東西堀S A 1790が建つが、これは敷地内を区画する堀と考えられる。坪の北半の利用形態は、今回の範囲では不明である。ただ、南北溝S D 1892が坪の南北中心線上に位置するので、これを坪分割溝とすると坪の北半を更に細分して利用した可能性がある。

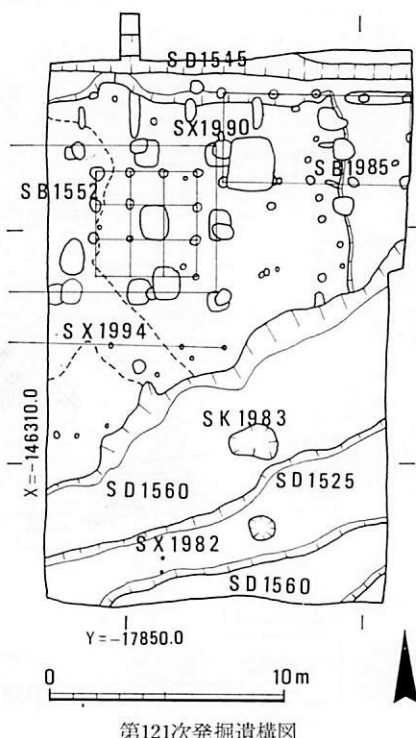
B期：坪割はA期のものを踏襲する。坪の南半の西半の区画には、東西棟建物S B 1905を中心に各建物が建つ、東半の区画では、東西約20m、南北約15mの範囲に和同開珎鑄造工房に関係すると推定される焼土ピットが多数分布する。この時期は一部の建物等に建替えがある。即ち、南北棟S B 1829を廃して東西棟建物S B 1822が建つ。また、その南に南北棟建物S B 1791及びS B 1781が新たに建つ。そして、東西堀S A 1793及び南北溝S D 1783は後に鋤型の堀S A 1792に替わる。

C期：坪割の小路は廃絶し、坪の利用は全域すなわち1町分になる。四面廂付の東西棟建物S B 1817を中心に東側に南北棟建物S B 1826南側に東西棟建物S B 1813が建つ。この建物の桁行中央間のみ10尺と広く、S B 1817の中央間と揃えている。この時期の建物は全体に規模が大きく、柱筋がよく揃う計画的な配置となっている。

D期：坪の利用は1町と考えられ、東西棟S B 1835をはじめ6棟の建物と2条の堀とから構成される。建物規模は柱間が6～8尺と比較的小さく、また、配置は計画性にやや欠ける。

遺物：出土遺物は多岐にわたっているが、瓦の出土量は極めて少ない。特筆すべきものとしては、焼土ピット群から大量に出土した和同開珎銭範片や周縁に甲張りのついたままの鑄放し和同銅銭及び和同銭の鑄造に使用したと思われるるつば、ふいごの羽口等がある。和同銭や銭範の多くは開の字を「開」につくるなど新和同に属する。

まとめ、今回の調査で七坪の変遷を知ることができた。それぞれの時期は、出土遺物から、A期が奈良時代初頭、B期が奈良時代中頃から後半、C期が奈良時代末期、D期が平安時代初期にあてることが



できる。また、平城京造営当初から、坪を分割する施設として坪内小路が存在すること、及び平城京内において和同開珎を鑄造していたことが確認できたことは重要である。なお、この調査結果は、「平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報」（奈良国立文化財研究所1980年3月）として公開した。

左京三条二坊六坪の調査（第121次） 特別史跡平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園の発掘調査である。調査区は第96次（昭和50年度）の北東及び南側の2ヶ所であるが、南側の調査区では奈良時代の顕著な遺構はない。北東の調査区からは、掘立柱建物2棟、塀1条、溝3条、土壇などを検出した。時期区分は従前と同じくA、Bの2時期に区分できる。東西棟建物S B1552はA期に属し、桁行7間、梁行2間、柱間寸法10尺等間と規模が確定した。内部には、掘立柱の棚状の施設がある。東西棟建物S B1985は桁行4間、梁行2間、柱間寸法7尺等間でB期に比定される。斜行溝S D1525は旧河川S D1560の流路を利用して掘られる園池の導水路である。またS D1545は北面築地の南雨落溝で、南岸には橋梁の据え付け痕跡と思われる三条の溝状遺構S X1990がある。

おもな遺物にはS K1983から出土した「侍従」と記する墨書土器、S D1545から出土した多量の土馬、またS D1525の下層から出土した木簡38点がある。木簡には和銅三年の年紀のあるもの、北宮と記したものなどがある。今回の調査は小面積であったが、園池の導水路を検出したのをはじめ、この坪の建物等が坪心から当初10尺方眼のち7尺方眼上に配置されることを改めて確認できた。また出土遺物からもこの地が平城宮と関係した公的施設でありしかも造営当初から存在したことも再度裏付けたといえよう。なお、今回の調査結果は「平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報」（奈良市教育委員会1980年3月）として公開した。

条坊遺構の調査（第118次—8, 12, 22, 23, 31次） 平城京内における条坊推定位置での開発事業の場合、小規模であっても事前調査が行なわれることが多い。1979年度の調査で条坊遺構を確認できたのは別表に示す5件であった。この

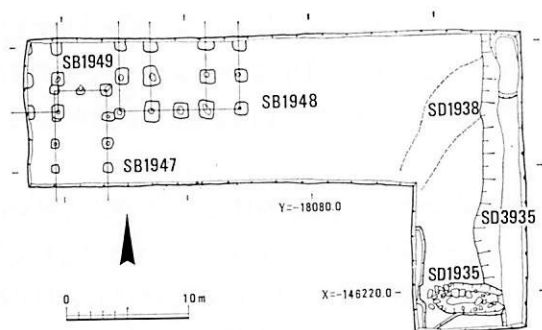
うち左京三条一坊十五坪の調査（第118—8次）は、ホテル建設に伴う調査である。発掘区は十五坪の東端にあたり、東一坊大路の西側溝をはじめ掘立柱建物3棟、溝、旧河川、土壇などを検出した。南北棟建物S B1947は、桁行4間

調査次数	位 置	条坊遺構名	幅
第118—8次	左京三条一坊十五坪	東一坊大路西側溝	3~4m以上
第118—12次	右京五条二坊十四坪	五条条間路南側溝	3 m 以上
第118—22次	左京三条一坊八坪	二条大路南側溝	約3.5m
第118—23次	左京三条二坊坊間路	二坊坊間路西側溝	約2.5 m
第118—31次	右京一条二坊西一坊大路	西一坊大路路面	—

条坊遺構の調査表

以上梁行2間、柱間寸法7尺等間である。南北棟建物S B1948桁行は3間以上、梁行4間、東西廂付である。西側のS B1949はS B1948とよく柱筋が揃うので、これと併存する南北棟建物と考えられる。柱掘形の切り合いからS B1947→S B1948、S B1949の順に建替えを行なっている。南北溝S D3935は、東一坊大路の西側溝で、東岸は調査区外となる。S D1935は石組の東西溝で、十五坪の東西中軸上に位置しており築地下を通してS D3935と続く東西溝の暗渠部分と考えられる。

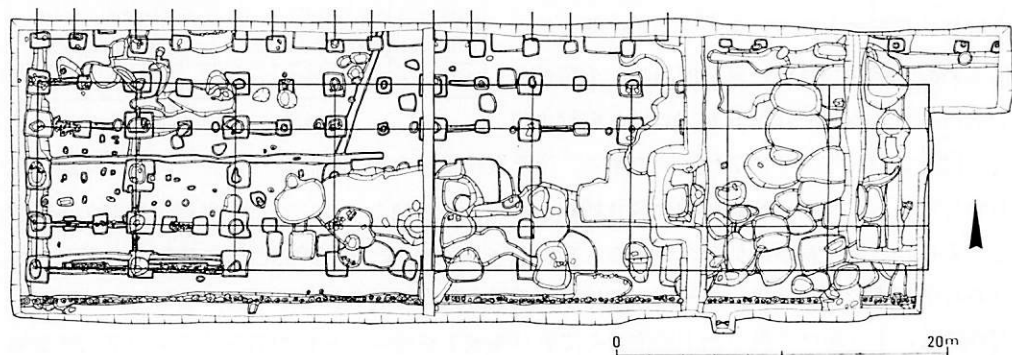
遺物には、瓦埴類、土器類、木簡などがある。木簡は18点あり、すべて破片または削り屑で、S D3935の北寄りの下層からまとまって出土しており、そのなかに「丹波国□上郡□」、「□丹波国綾部□」、「雄膳」などと墨書したものがある。また、同じ場所から馬骨が一個体分横たわった状態で出土している。



第118—8次発掘遺構図

薬師寺東僧房の調査 本調査は東僧房の再建工事に先立ち、その復原資料を得ることを目的として行なった。薬師寺東僧房については昭和45年に、薬師寺発掘調査団（団長杉山信三博士）が基壇南縁の全長55mと第1房を明らかにし、東僧房の位置、規模および房の間取をほぼ確定している。今回その既発掘区を含め、大房第1房から第9房までの全面発掘を行なった。

遺構の保存状態は第1・2房は良好であったが第3房以東はきわめて悪く、礎石はすべて抜きとられていた。大房の基壇は砂質土と粘質土を互層に約60cm積んでいる。基壇南端には人頭大の玉石や玉石抜き取り痕跡があり、基壇は玉石積基壇となろう。しかし大房基壇北端には葛石はない。南側基壇の出は南側柱心から2.1mである。この基壇に接して南側には幅1.2m、深さ0.4mの雨落溝がある。大房（第1房～9房）は食堂と棟心をそろえている。各房は梁行が4間（9尺+10尺+10尺+9尺）、桁行が2間（10尺+10尺）で、前・中・後の3室に分けられる。内部は土間床である。第1・2房の正面には凝灰岩の地覆石が20尺の間口を引通しており、中間に礎石据付掘形は存在しない。地覆石の内側に接して中央部分7.5尺にわたって凝灰岩を並べており、西側に袖壁を設け、中央を開口部としていたらしい。中室正面には礎石据付掘形が2箇所あり、3間にわりつけ、中央間を扉口としているらしい。背面には中央に礎石据付掘形があり、2間にわたりつけており、西側には地覆に用いた瓦の抜き取り痕跡、東側には中央より東7尺に円形の礎石据付掘形がある。この掘形は方立柱礎石据付のものであると考えられることよ



薬師寺東僧房発掘遺構図

り西の間は壁、東の間は東端3尺を壁、残り7尺を後室への扉口としているようである。第1・2房の中室には西および東寄りにそれぞれ東石の抜き取り痕跡があり、西側に床を東側に棚を設置していたのであろう。後室は2室に分けられ、東側は背面に扉口や壁の痕跡はなく、開放となっていたようである。大房の北側柱心から2.4m北には各房ごとに西側柱筋を大房の房境にそろえた1間の礎石据付掘形がある。これは西僧房と同様に南北棟の付属屋南側柱位置にあたる。この南側柱礎石据付掘形の下層で素掘りの東西溝(幅0.8m、深さ0.4m)を検出した。溝は大房の北雨落溝と考えられ、創建当初には付属屋は存在しなかったことが明らかとなった。

東僧房創建の時期については大房の礎石据付掘形の底に敷いてあった新しい軒瓦が平城宮軒瓦編年の第Ⅱ期にあたることから、養老5年から天平17年頃であろうと考えられる。一方東僧房の廃絶の時期については、焼失した東僧房の第1房より出土した土器より10世紀後半頃と考えられるので、東僧房の焼失は長和4年(1015)に撰述された「薬師寺縁起」に記載されている天禄4年(973)の食殿堂童子宿所からの出火による僧房焼失の記載とも矛盾しない。今回の発掘区内においては、東僧房は焼亡後再建されていないことが明らかとなった。

出土遺物には瓦・土器・銭貨がある。瓦はおもに南雨落溝・土壙・礎石据付掘形より出土した。この瓦の中には平安時代以降のものも含む。土器は点数は少ないが、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁が出土した。この他に土壙中から200点余の瓦器碗・皿がまとまって出土した。銭貨は富寿神宝で、土壙中より5枚重なって出土した。

薬師寺西面大垣 この調査は住宅新築に伴う事前調査で、調査地は薬師寺推定西北門の北76mの地点である。当該地は薬師寺の西面を画す大垣遺構の存在が想定されていた。検出した遺構は大垣の基壇である。大垣は地山を削りだした基壇上にきめの細かな土をつき固めたもので、基壇幅5.25m残存高1.3mである。基壇の西外方には幅2.35m、深さ0.8mの空堀が接する。この大垣積み土内にも瓦器・羽釜片が含まれており、中世に大垣の修築がおこなわれたことが考えられる。

東大寺境内 この調査は東大寺祭器庫建設予定地の事前調査で、発掘地は僧坊推定地に北接する地域である。当該地は江戸初期の「東大寺寺中寺外惣絵図」にみられる塔頭金蔵院にあたる。検出した主な遺構は石組の東西溝2条、土壙1基である。石組東西溝は幅約3m、深さ0.7mあり、幹線水路ともみられる。溝埋土出土遺物から考え、この東西溝は鎌倉時代以降のものである。この溝を埋めた後、その北約1.5mに石組東西溝が掘削される。溝幅は0.6mである。今回検出した遺構より、僧房の北限を東西幹線水路以南に求めることが可能となった。

西大寺 この調査は西大寺信徒会館建設予定地の事前調査で、発掘地は西塔跡の南側である。検出した遺構は奈良時代の南北棟建物1棟(東側柱列3間分)、東西棟建物(3間×2間)2棟、それに近世以降の井戸と上水施設である。今回の調査地は平城京右京一京二坊七坪にあたり、検出建物は西大寺創建以前のものである。

(菅原 正明・毛利光俊彦・亀井 伸雄)